

# 遠野市におけるホップ栽培とまちおこし

## 3 回生 林正直

### I. はじめに

ホップはアサ科のつる性の多年草植物である。ホップはビールを製造する際の重要な原料であり、ビールに苦みや香りをつける。日本におけるホップ自給率は1960年代には80%近くあったがその後低下した。ホップの自給率は1999年を最後に統計が無い。農林水産省ホップに関する資料によると1999年時点での自給率は7.5%である。現在の自給率はさらに低下している。岩手県はホップの生産量が全国1位であり、中でも遠野市での生産量が多い。しかし、近年は少子高齢化や後継者不足により生産量は最盛期の6分の1にまで減少している。現在、遠野市では「ホップの里からビールの里へ」を合言葉に特産のホップやそれを原料にした地ビールを用いてまちおこしを行っている。まちおこしを担うのは後述するBrew Good株式会社、遠野市産業部産業企画課、遠野市内のビール醸造所、ホップ農家などである。遠野市内の醸造所やホップ畑などを訪れる「ビアツーリズム」や「遠野ホップ収穫祭」といった取り組みが行われている。(河上ほか,2001)は地ビール事業について「①相対的に小規模な醸造施設で、②多様性や新鮮さを前面に打ち出し、③さらに産地の風土を付加させることで独自性を発揮し、消費者に旅をさせる事業展開を大半の事業者が採用する。」と述べている。遠野市内には2つ醸造会社があり、両社とも大手ビール会社に比べ小規模な施設である。さらに両社とも独自の多様な地ビールを製造している。遠野市はホップを栽培してきた歴史があり、「ビアツーリズム」はまさに消費者に旅をさせる取り組みである。また、遠野市における地ビール事業の動きは農業の6次産業化と捉えることができる。農林水産省によると農業の6次産業化とは「一次産業としての農林漁業と、二次産業としての製造業、三次産業としての小売業等の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組」<sup>1</sup>と定義している。ホップ栽培は遠野市の地域資源であり、それを活用し地ビール製造や「ビアツーリズム」を行うことは一次産業、二次産業、三次産業の複数領域に及ぶ。農業の6次産業化について(鈴木ら,2019)は「農業だけでなく製造業や小売業にも取り組み、経営を多角化することによって生産物の価値を高めるほか、産業及び農村経済の活性化、収益の向上や雇用の創出を図ることが狙いである」と述べている。遠野市のホップを用いたまちおこしは地域活性化政策として位置づけられる。もともとは地域の農業として営まれてきたホップ栽培が地ビール産業や観光業へと分化していったと言える。本稿では遠野市でホップ栽培がまちおこしの資源として活用されるようになった過程とその実態について考察する。

## II. 岩手県及び遠野市におけるホップ栽培

### 1) 国内におけるホップ栽培

まずは国内におけるホップ生産について近年の傾向を見る。図1は国内におけるホップの生産量推移である。図1より1990年には1,700 t 近く生産量があった。しかしその後、2000年代まで急速に減少している。そして2000年代以降も減少傾向が続いている。2020年以降では生産量が200 t を下回っている。

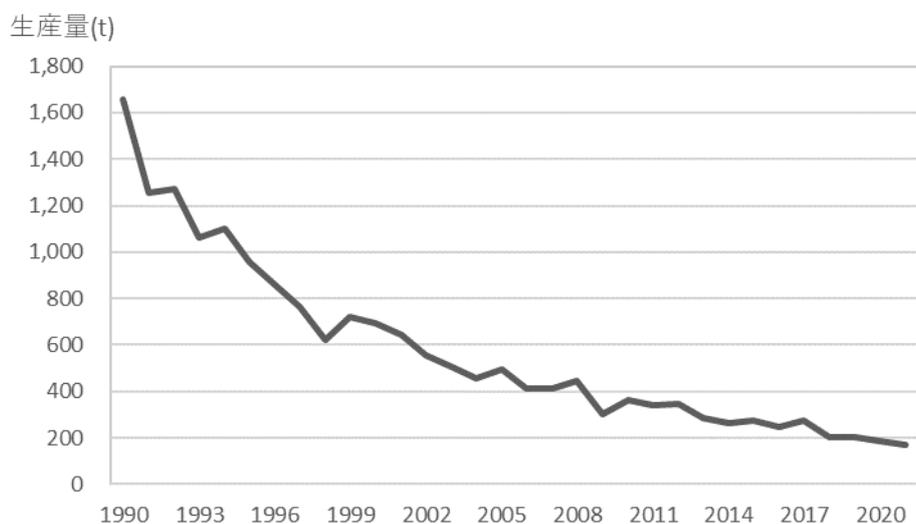


図1 国内におけるホップの生産量推移  
(農林水産省 IIホップより作成)

図2は国内におけるホップの国内自給率の推移である。図2より1967年時点ではホップの国内自給率はおよそ80%ほどであった。国内のホップ生産は1960年代に最盛期をむかえた。しかし、1960年代以降ホップの国内自給率は急速に低下した。これは安価な外国産ホップの輸入が増加したためである。図2より1999年時点での国内自給率は10%を下回っており、およそ7.5%である。現在のホップの国内自給率はさらに低下している。

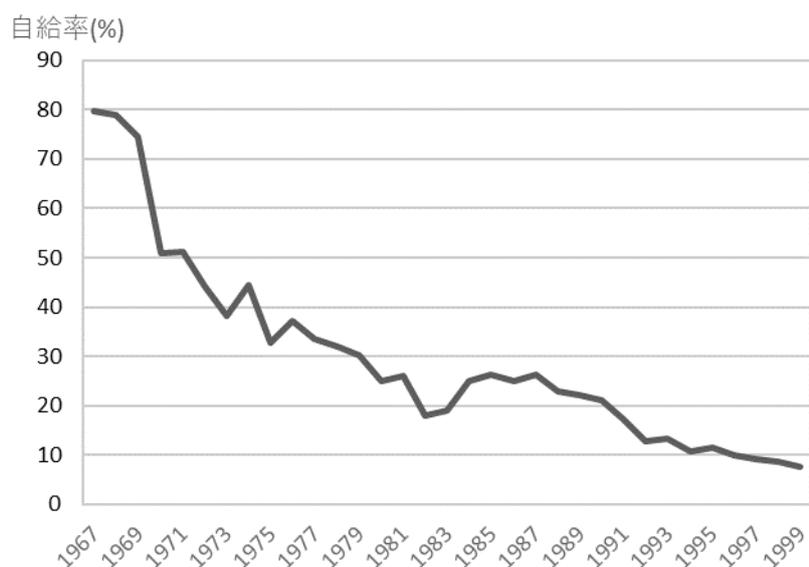


図2 国内におけるホップの自給率推移  
(農林水産省 ホップに関する資料より作成)

2021年の国内ホップ生産量は171tである。そのうち生産量に占める東北地方の割合は95%にのぼる。東北地方以外が占める割合はわずか5%である。これはホップが冷涼な気候を好むという特性による。東北地方では冷涼な気候を生かし古くからホップ栽培が盛んであった。

図3は東北地方における市区町村別ホップ生産地を地図上に表したものである。図3より内陸の山間部に生産地が多い。また、岩手県内に多くの産地が見られる。岩手県においても他産地と同様に内陸の山間部に生産地が多い。岩手県内では軽米町、岩手町、盛岡市、紫波町、花巻市、遠野市、北上市、奥州市で生産が行われている。

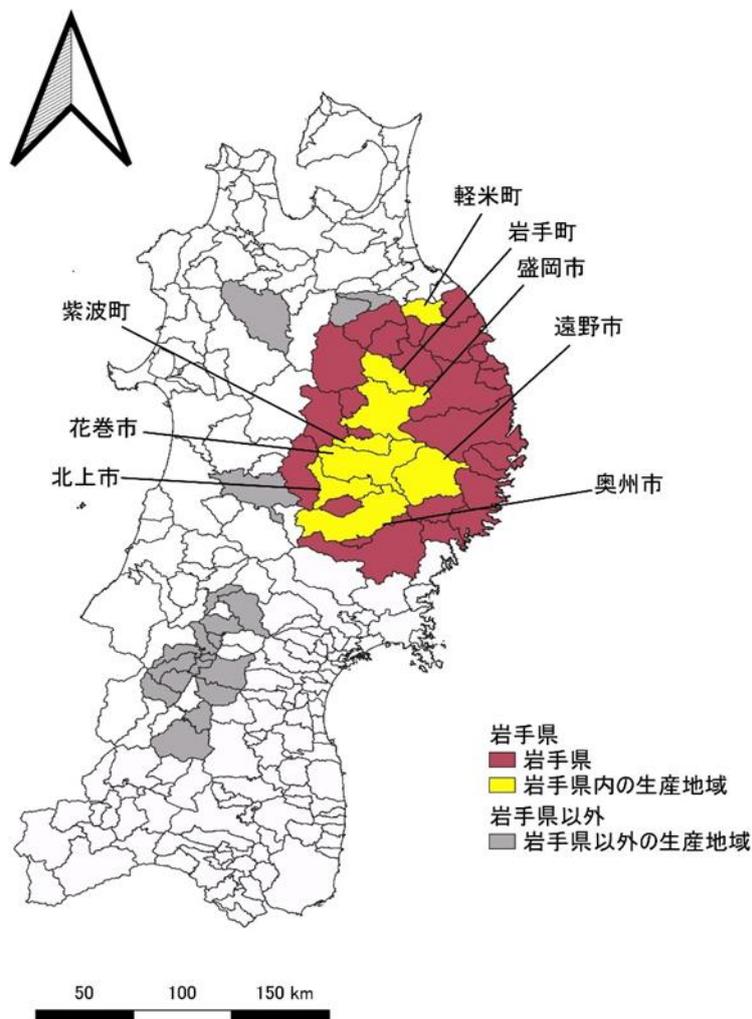


図3 東北地方市区町村別ホップ生産地  
(東北農政局 東北管内のホップ生産地マップを基に QGIS で作成)

## 2) 岩手県におけるホップ栽培

2021年の国内ホップ生産量に占める岩手県の割合は47%である。このことから岩手県は国内のホップ生産のおよそ半数を占めていることが分かる。岩手県はホップの生産量が全国1位である。岩手県は国内ホップ生産において重要な産地といえる。

図4は岩手県における1990年以降のホップ生産量推移である。図4より1990年時点では生産量は605tであった。しかし、その後2000年代にかけて生産量は急速に減少した。これは図1と同様の傾向と言える。2010年代では生産量は100~200tの間で推移している。2020年以降では生産量は100tを下回っている。2020年の生産量は1990年の生産量の6分の1以下の91tにまで低下している。

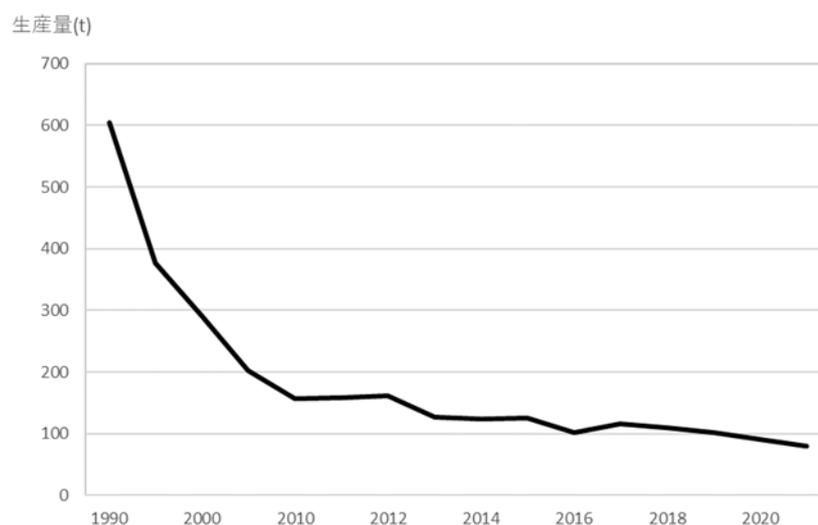


図4 岩手県におけるホップ生産量推移  
(農林水産省 IIホップより作成)

図5は1993年から2016年までの岩手県におけるホップ栽培戸数である。2004年から2010年までの間は統計が無い。図5より1993年時点では栽培戸数は350戸以上であった。また、2013年以降、栽培戸数は100戸を下回っている。岩手県内のホップ農家はほぼすべてホップ生産組合に所属している。

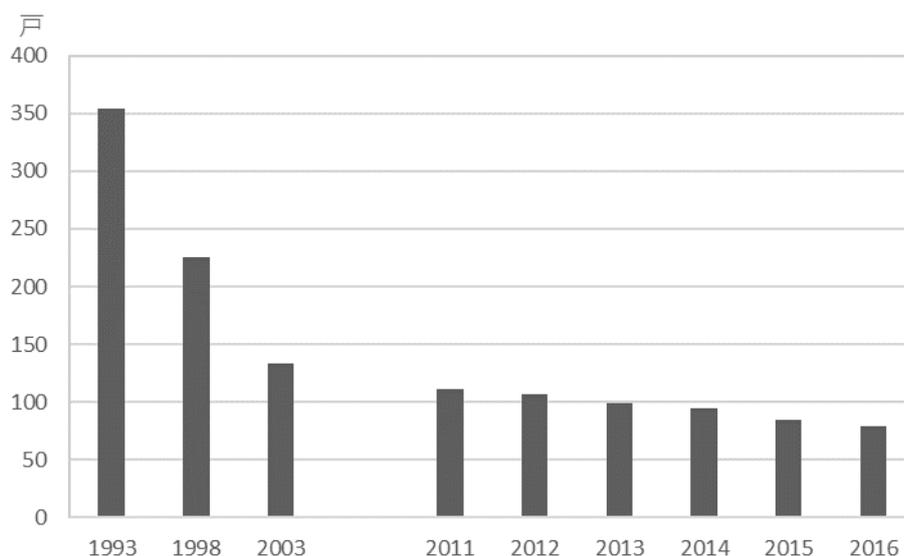


図5 岩手県におけるホップ栽培戸数

(ホップに関する資料 平成29年5月 岩手県農林水産部農産園芸課)より作成

表1は岩手県におけるホップ生産組合の一覧である。市町村名は各組合が管轄する地域、栽培戸数は各組合内の栽培戸数である。ホップ栽培は大手ビール会社との契約栽培である場合が多い。岩手県においてはほぼすべて大手ビール会社との契約栽培である。表1より岩手県北ホップ農協（岩手県北ホップ農業協同組合）はサッポロ社との契約栽培、岩手アサヒホップ生産組合はアサヒ社、遠野ホップ農協（遠野ホップ農業協同組合）は麒麟社、江刺ホップ組合は麒麟社との契約栽培を行っている。2022年に遠野ホップ農協と江刺ホップ組合は合併した。名称は遠野ホップ農協のままである。表1より栽培戸数が最も多いのは遠野ホップ農協で22戸である。次いで岩手県北ホップ農協で14戸である。岩手県内の合計栽培戸数は47戸である。前述したように岩手県内のホップ農家はほぼすべてホップ生産組合に所属している。図5中で最新である2016年の栽培戸数が80戸近くあることを考えると、栽培戸数は減少している。

表1 岩手県におけるホップ生産組合（2021年現在）  
（農林水産省 IIホップより作成）

組合名	市町村名	契約栽培先	栽培戸数
岩手県北ホップ農協	軽米町、岩手町	サッポロ社	14
岩手アサヒホップ生産組合	盛岡市	アサヒ社	1
遠野ホップ農協	遠野市	麒麟社	22
江刺ホップ組合	奥州市、北上市	麒麟社	10
県計			47

※サッポロ社はサッポロビール株式会社、アサヒ社はアサヒビール株式会社、麒麟社は麒麟ビール株式会社  
（農林水産省 IIホップより作成）

表2は岩手県内のホップ生産組合別栽培面積である。2021年のデータのため遠野ホップ農協と江刺ホップ組合は合体前である。表2より遠野ホップ農協の栽培面積は2,264.0aで最も大きい。遠野ホップ農協が組合計面積に占める割合は50%である。次いで岩手県北ホップ農協の栽培面積が大きく1,723.9aで、組合計面積に占める割合は38%である。このことから岩手県内のホップ栽培面積の半数を遠野ホップ農協が占めていることが分かる。表1、表2より遠野市は岩手県内で最もホップの栽培戸数が多く、栽培面積が広いため県内でもホップの栽培が盛んな地域といえる。

表2 ホップ生産組合別栽培面積（2021）

組合名	栽培面積(a)	割合(%)
遠野ホップ農協	2,264.0	50
岩手県北ホップ農協	1,723.9	38
江刺ホップ組合	471.0	11
岩手アサヒホップ生産組合	48.0	1
組合計	4,506.9	100

（農林水産省 IIホップより作成）

### 3) 遠野市におけるホップ栽培

遠野市でホップ栽培が始まったのは1963年からである。1965年には遠野ホップ農業協同組合が設立された。遠野市では麒麟社との契約栽培で栽培が行われてきた。契約栽培では農家が生産したホップをすべて麒麟社が買い取る全量買い取りである。1986年には麒麟社に関わるホップ農業協同組合で遠野ホップ農協が生産量1位となった。

図6は遠野市におけるホップ生産量である。栽培が始まった1963年の統計は無い。また、1995年から1998年と2000年から2007年までの統計は欠如している。図6より最も生産量が多いのは1987年の228tである。遠野市でホップ栽培が始まった1963年から1980年代まで生産量は増えていたが1990年代以降減少傾向にある。遠野市産業部産業企画課によると2009年は強風被害、2016年は台風による被害で生産量が低下した。2013年以降、生産量は50tを下回っている。

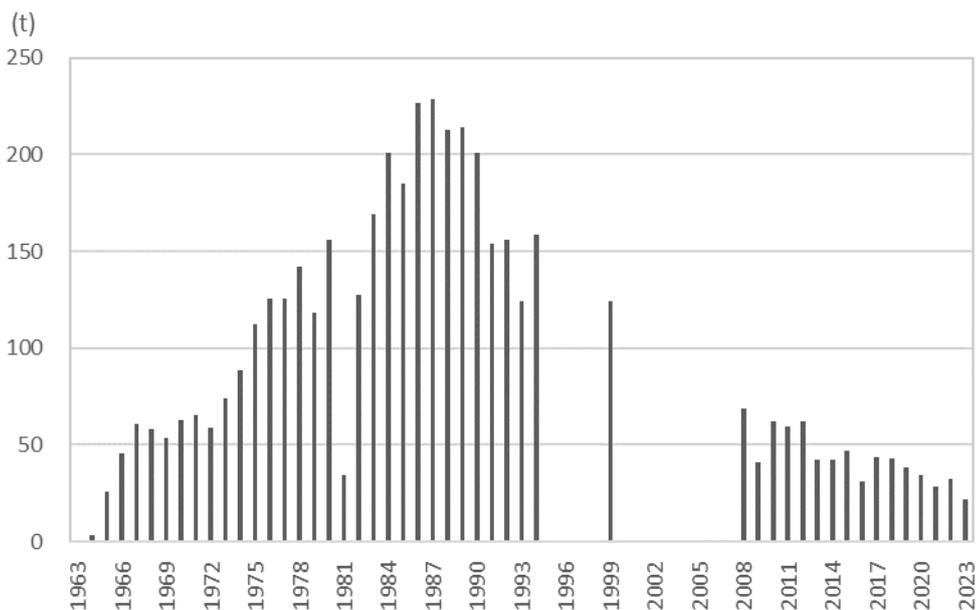


図6 遠野市におけるホップの生産量

(遠野ホップ農業協同組合資料、遠野市産業部産業企画課資料より作成)

図7は遠野市におけるホップ生産額の推移である。1993年から2007年の統計は欠如している。図7より最も生産額が多い年は1986年でおよそ5.3億円である。しかし、1986年以降生産額は減少が見られる。2019年以降生産額は1億円を下回っている。



図7 遠野市におけるホップ生産額の推移  
(遠野ホップ農業協同組合資料及び遠野市産業部産業企画課資料より作成)

図8は遠野市におけるホップ栽培面積の推移である。栽培が始まった1963年時点での栽培面積はおよそ7.7haである。図8より1963年以降栽培面積は増加し、1980年代に栽培面積は最大となりおよそ110ha前後で推移した。しかし、1993年までにかけて大幅な減少が見られる。これは1993年までにかけて減反が行われたためである。減反が行われる以前にはトヨミドリという品種が栽培されていた。トヨミドリは豊産性が高い品種であった。しかし、麒麟社が買い取る品種を変更し、トヨミドリの需要が低下した。その結果トヨミドリが生産過剰になったため減反が行われた。

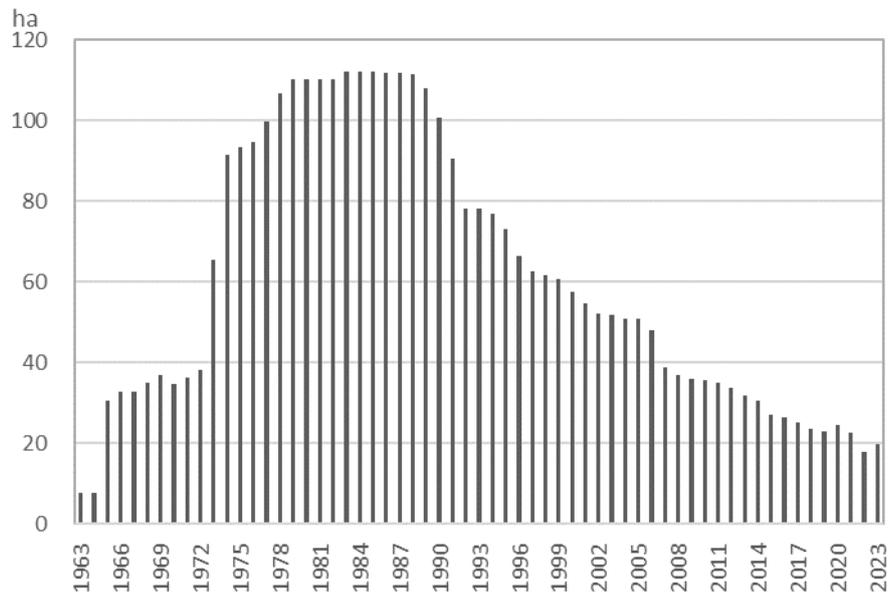


図8 遠野市におけるホップ栽培面積の推移  
 (遠野ホップ農業協同組合資料より作成)

図9は遠野市におけるホップ農家数の推移である。栽培が始まった1963年時点での栽培戸数は71戸である。最も栽培戸数が多かった1974年時点での栽培戸数は239戸である。図9より1993年までにかけて栽培戸数の大幅な減少が見られる。これは前述した減反が要因である。減反によってホップ農家は栽培品種をトヨミドリから変更するか、ホップ栽培をやめるか選択を迫られた。結果として半数近くの農家がホップ栽培をやめ、栽培戸数が減少した。また、近年では高齢化による農家数の減少と後継者不足が問題となっている。

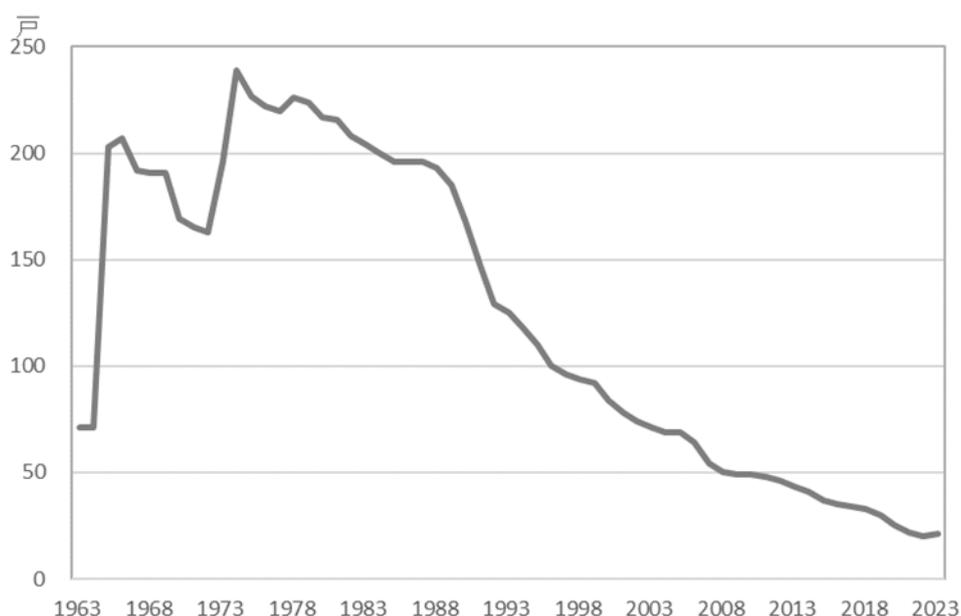


図9 遠野市におけるホップ農家数の推移  
(遠野ホップ農業協同組合資料より作成)

図10は遠野市におけるホップ畑、ホップ加工処理場分布図である。図10よりホップ畑は鱒沢地区、遠野北地区、土淵地区、青笹地区、上郷地区に分布している。中でも遠野北地区、土淵地区、青笹地区、上郷地区に多く分布している。遠野ホップ農協によるとホップ畑は管理しやすいように農家の自宅近くに作られてきた。市役所周辺は市の中心地区であり市街地が形成されている。そのため市の中心地区にはホップ畑は見られない。図10より土淵地区と上郷地区にはホップ加工処理場が見られる。ホップ加工処理場では蔓の状態ですり取ったホップから毬花と呼ばれる部分を取り分け乾燥させる。そして乾燥させた毬花をキリン社に出荷する。

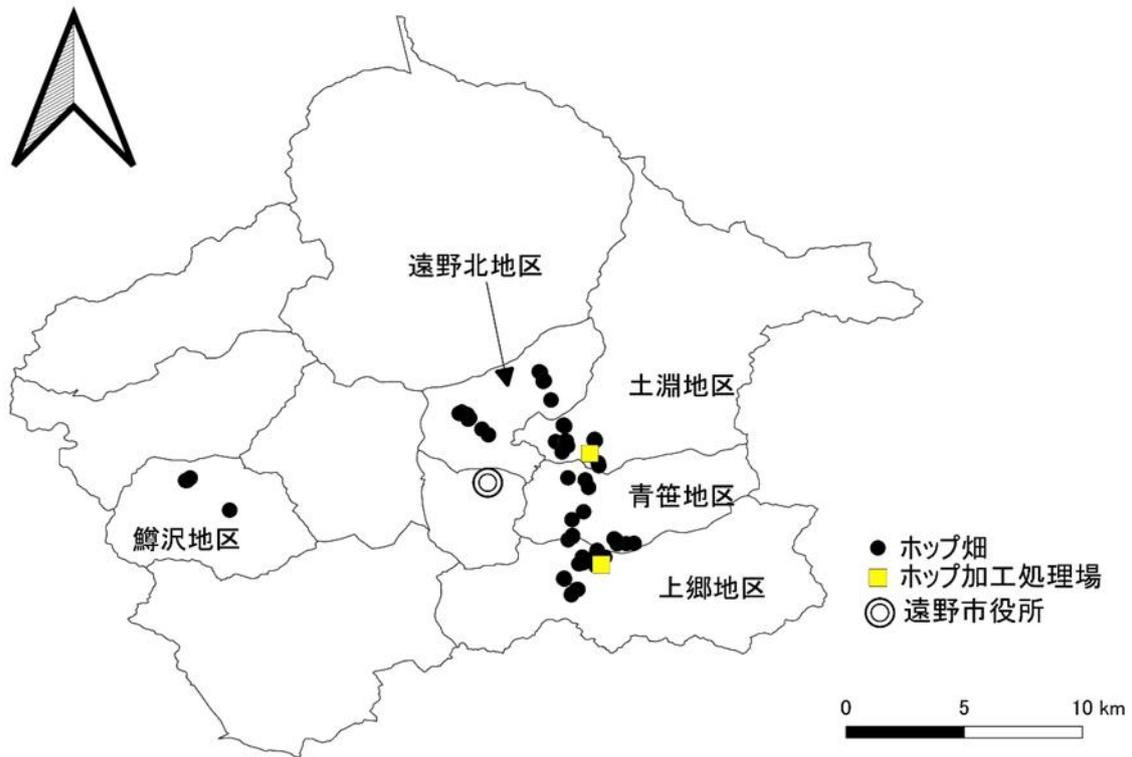


図 10 遠野市におけるホップ畑、ホップ加工処理場分布図  
 (遠野ホップ農業協同組合資料を基に QGIS で作成)

以上のように、国内におけるホップの生産は減少しており、近年は 200 t を下回っている。国内におけるホップの生産の 95% は東北地方が占めている。中でも岩手県はホップの生産量が全国 1 位である。遠野市は岩手県内でもホップの栽培が盛んで栽培面積は県内で最も大きい。ホップは大手ビール会社との契約栽培で栽培されることが多い。遠野市においてはキリン社との契約栽培である。遠野市では 1980 年代にホップ栽培の最盛期を迎えた。しかしその後、栽培規模は大幅に縮小し、農家数も減少した。近年では高齢化による農家数の減少、後継者不足が問題となっている。

### III. 遠野市のホップ・ビールを用いた地域おこし

II章で述べたように遠野市では1963年よりホップ栽培が行われてきた。しかし、近年では高齢化による農家数の減少、後継者不足が問題となっている。そこで2007年にTKプロジェクトが発足した。TKプロジェクトは遠野市と麒麟社が日本産ホップの持続可能な生産体制を通じて地域活性化を図ることを目的として発足した。また、「ホップの里からビールの里へ」を合言葉に、「ビールの里構想」も開始した。「ビールの里構想」はホップを観光資源として活用し、遠野市をホップを栽培する場所から新しい産業が生まれる場所へと変化させる取り組みである。TKプロジェクトは発足以来様々な企業、団体が参加している。具体的な取り組みとして、後述する遠野ホップ収穫祭、遠野ビアツーリズムが挙げられる。

表3はTKプロジェクトに関連する出来事をまとめた年表である。1999年に遠野市の上閉伊酒造株式会社において「遠野麦酒 ZUMONA(ズモナビール)」の醸造が開始された。これは遠野市における初の地ビールである。上閉伊酒造は後にTKプロジェクトに参加する。2004年には麒麟社より「麒麟一番搾り とれたてホップ生ビール」の販売が開始される。通常、ホップは乾燥させて使用するのが一般的である。しかし、このビールではその年の夏に収穫された遠野産ホップを生の状態で急速凍結させ使用している。このビールは毎年11月頃に販売される期間限定商品である。缶のラベルには「岩手県遠野産ホップ使用」と書かれておりホップ産地としての知名度向上に貢献している。2015年からはTKプロジェクトの取り組みが加速し、遠野ビアツーリズムが開始され、遠野ホップ収穫祭が初開催される。2016年にはビールの里構想に地域おこし協力隊制度が導入された。2017年には株式会社遠野醸造が設立された。遠野醸造は2016年に導入された地域おこし協力隊で遠野市に移住した数名によって起業した。遠野醸造は遠野市内で地ビールの醸造を行っている。遠野醸造もTKプロジェクトに参加している。2018年にはBEER EXPERIENCE株式会社が設立された。BEER EXPERIENCE株式会社はビールのつまみとして提供される遠野パドロン（小型のシシトウのような野菜）の生産、ホップの生産、ビアツーリズム事業を行う。しかし、2023年現在BEER EXPERIENCE株式会社は業務を停止している。さらに同年には株式会社Brew Goodが設立された。Brew Goodではビールの里構想を具現化するためにブランディング事業や商品開発を行う。また、ビールの里構想で得られた知見を基に他の自治体、企業のブランディングなどの支援を行う。2020年にはBrew Note 遠野が開業する。Brew Note 遠野は遠野市内にある喫茶店であるがクラフトビールを飲むことができる。開業した村上敦司氏は麒麟社の元主幹研究員であり、ホップの研究をおこなっていた。2021年にはTONO Japan Hop Countryが立ち上げられた。TONO Japan Hop Countryは遠野ホップ収穫祭や遠野市内のビール醸造所、ビアツーリズムの紹介を行う。

表3 TKプロジェクト関連年表

1999年	「遠野麦酒ZUMONA（通称ズモナビール）」醸造開始
2004年	「キリン一番搾り とれたてホップ生ビール」販売開始
2007年	「ビールの里構想」が開始し、「TKプロジェクト」が発足
2015年	「ホップの里からビールの里へ」新スローガン誕生
	遠野ビアツーリズム開始
	遠野ホップ収穫祭初開催（来場者2,500人）
2016年	ビールの里構想における地域おこし協力隊制度の導入開始
	第二回遠野ホップ収穫祭（来場者4,500人）
2017年	株式会社遠野醸造設立
	第三回遠野ホップ収穫祭（来場者6,000人）
2018年	遠野市・キリンビール・JR東日本盛岡支社で地域連携協定を締結
	BEER EXPERIENCE株式会社設立
	株式会社BrewGood設立
	第四回遠野ホップ収穫祭（来場者7,500人）
2019年	第五回遠野ホップ収穫祭（来場者12,000人）
2020年	世界的に有名なホップ博士（村上敦司氏）が遠野に拠点を移し、BrewNote遠野を開業
2021年	新ブランド「TONO Japan Hop Country」立ち上げ

(TONO JAPAN HOP COUNTRY ホームページより作成)

表4は TK プロジェクトに参加している企業や団体とその取り組みについてまとめた表である。遠野市は主に関係機関との調整を行う。Brew Good は TK プロジェクト全体のコーディネートや企業向けのホップ・ビール関連の見学会を行う。また、ふるさと納税での TK プロジェクトの財源確保をおこなっている。上閉伊酒造、遠野醸造はビール醸造を行う。JR 東日本はホップ収穫祭時に臨時列車の運行などを行う。遠野ふるさと商社は遠野市の物産振興や観光活性化を行う地域商社である。遠野ふるさと商社では市内の道の駅での地ビールやホップ関連商品の販売を行う。To know 遠野は遠野市に関するイベント企画や遠野市の文化、観光を発信する団体である。また、遠野山里ネットは遠野市の地域振興を行う NPO 法人である。遠野山里ネットは TK プロジェクトに参加はしていないがビアツーリズムは実施している。To know 遠野と遠野山里ネットは現在業務を停止している BEER EXPERIENCE 株式会社に代わりビアツーリズムをおこなっている。各組織間で明確な役割分担がなく、TK プロジェクトの組織体系は明確でない。月に一度 TK プロジェクト関連組織が集まり会議を行い、各自がどのような取り組みを行っているかなど近況を報告する。

表4 TKプロジェクト関連組織とその取り組み

組織名	取り組み
遠野市	関係機関との調整
Brew Good	全体のコーディネートや見学会の開催
KIRIN社	ホップの買い取りや遠野産ホップを使ったビール醸造
上閉伊酒造	遠野産ホップを使ったビール醸造
遠野醸造	遠野産ホップを使ったビール醸造
遠野ホップ農業協同組合	ホップ栽培
JR東日本	ホップ収穫祭の臨時列車の運行
遠野ふるさと商社	遠野市内の道の駅等での地ビール販売
To know 遠野	ビアツーリズムの実施
遠野山里ネット	ビアツーリズムの実施

(遠野市産業部産業企画課資料より作成)

#### 遠野ホップ収穫祭

遠野ホップ収穫祭は毎年8月末に遠野市内の蔵の道ひろばで開催されるイベントである。上閉伊酒造と遠野醸造などが生産するビールや遠野の食材などが提供される。2015年に始まったイベントである。2020年から2022年まではコロナ禍のため開催が中止された。このイベントはTKプロジェクト関連組織内で実行委員会が立ち上げられ実行される。

図 11 は遠野ホップ収穫祭の参加者数の推移である。初開催の 2015 年には 2500 人が訪れた。その後来場者数は増加し、2019 年には 12,000 人が訪れた。2020 年から 2022 年まではコロナ禍のため開催が中止された。2023 年は 9,000 人が訪れた。遠野市産業部産業企画課によると豪雨のため釜石線が計画運休し、客足が伸びなかったという。

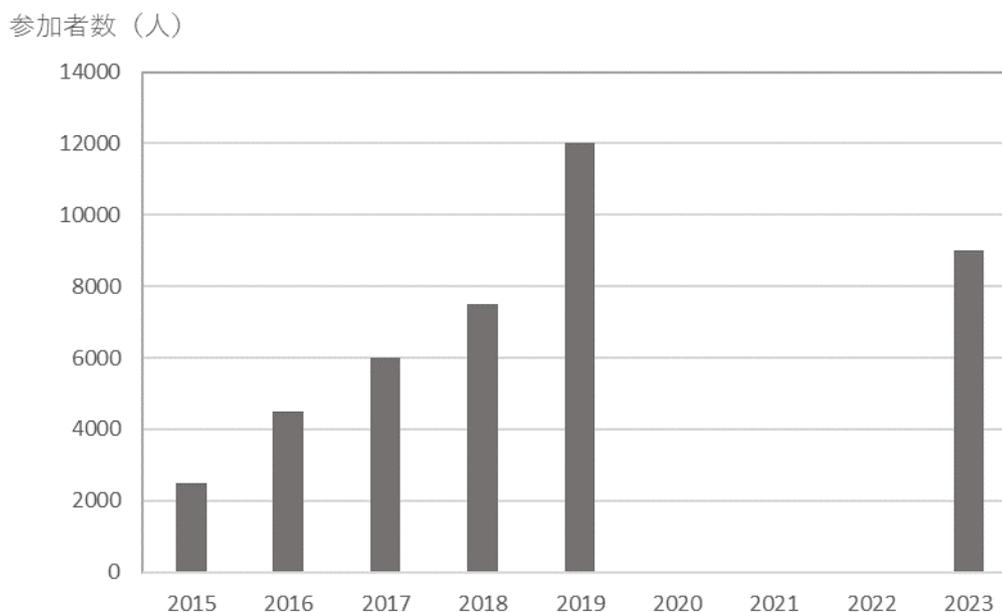


図 11 遠野ホップ収穫祭参加者数推移  
(TONO JAPAN HOP COUNTRY ホームページより作成)

表 5 は遠野ホップ収穫祭における来場者のうちアンケート回答者の交通手段別人数と割合である。回答数は 165 人である。表 5 より半数が鉄道を利用して訪れていることが分かる。これは飲酒をともなうイベントであるためである。また、ホップ収穫祭にあわせて JR 釜石線が臨時列車を運行していたためである。また、アンケート回答者 165 人のうち 78%が遠野市外から訪れていた。ホップ収穫祭は遠野市外からの集客効果が高いことが分かる。

表5 2023年遠野ホップ収穫祭交通手段別人数と割合（総数165人）

交通手段	人数（人）	割合（%）
鉄道（JR釜石線）	83	50
自家用車	46	28
徒歩	27	16
その他	5	3
バス	3	2
レンタカー	1	1
計	165	100

（ホップ生産地におけるビアフェスティバルと来場者の特徴に関する一考察  
 —「遠野ホップ収穫祭2023」来場者アンケート調査を基に— 石川美澄 第38回日本  
 観光研究学会全国大会論文集 p.261-266 より作成）

#### ビアツーリズム

遠野市では2015年よりビアツーリズムが開始された。ビアツーリズムでは遠野市内のホップ畑や醸造所などホップ・ビールに関係した場所をめぐる。また、遠野物語にゆかりのある市内の名所などをめぐる。車によるツアーやマウンテンバイクによるサイクリングツアーがある。ビアツーリズムはホップの収穫期である夏期に行われることが多い。また、冬期は寒さが厳しく積雪が多いためビアツーリズムは行われず。現在ビアツーリズムをおこなっているのは前述した To know 遠野と遠野山里ネットである。

図12は遠野市におけるホップ・ビールに関連する観光施設である。図12中の道の駅遠野風の丘では地ビールやホップに関する商品を販売しているほか、地ビールを飲むことができる。また、上閉伊酒造は遠野市内外の小売店で自社ビールの販売を行う。遠野醸造は小売店での販売はなく、併設するクラフトビールレストラン「遠野醸造 TAPROOM」での提供またはオンラインでの販売のみである。Brew Note 遠野は遠野市内にある喫茶店で前述したようにクラフトビールを飲むことができる。図12中のホップ畑は遠野市内の有名な観光地であるカップ淵から近いいため観光客が見学しやすい。ビアツーリズムでは遠野醸造やホップ畑などを訪れる。

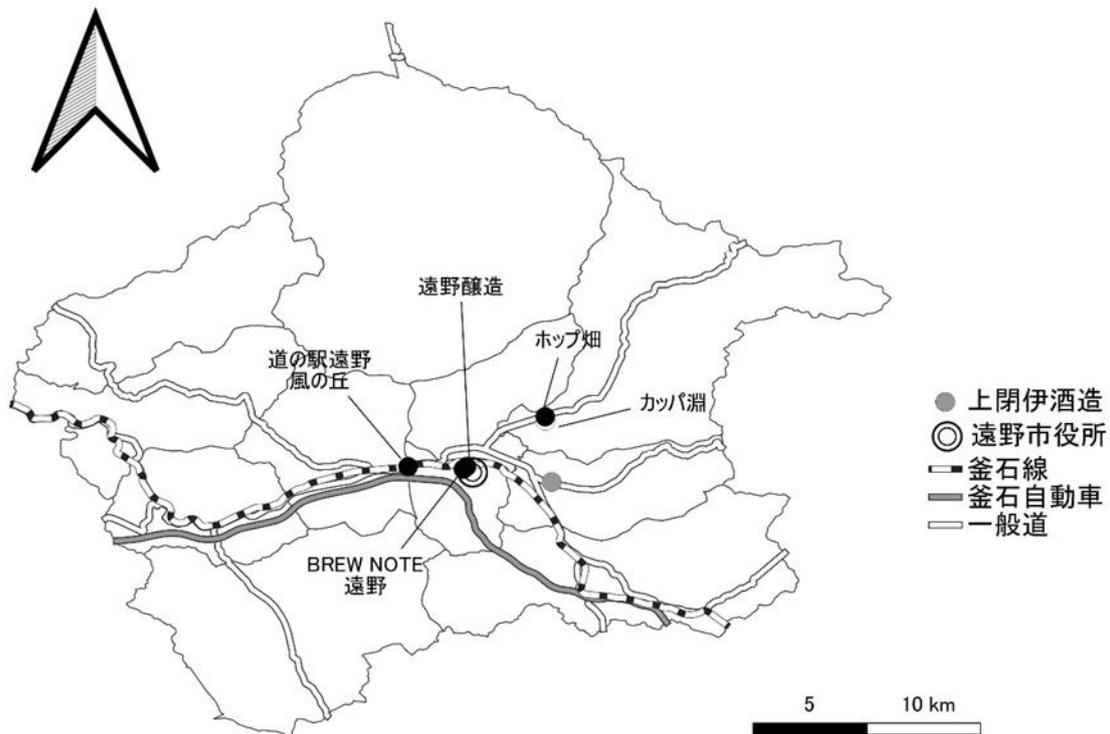


図12 遠野市におけるホップ・ビール観光施設  
(QGIS で作成)

以上のように、ホップ・ビールを用いたまちおこしとして遠野市では TK プロジェクトが行われている。TK プロジェクトには様々な企業や団体が参加している。TK プロジェクトに明確な役割分担や組織体系は無いが、プロジェクトに参加する企業や団体がそれぞれホップ・ビールを用いて遠野市を盛り上げようと取り組みをおこなっている。大きな取り組みとしては遠野ホップ収穫祭、ビアツーリズムが挙げられる。遠野ホップ収穫祭は遠野市外からの来場者も多く、ホップの産地としての遠野の知名度向上に貢献している。ビアツーリズムはホップ栽培を遠野市の観光資源として活用しようとする取り組みである。

#### IV章 おわりに

本稿では遠野市におけるホップ栽培の歴史とホップ・ビールを用いたまちおこしについて述べた。日本のホップ栽培はそのほとんどが東北地方で行われている。中でも岩手県は栽培が盛んで、遠野市は栽培面積が県内で最も広い。遠野市では1963年よりホップ栽培が開始された。遠野市はキリン社との契約栽培で栽培が行われている。1980年代にはホップ生産の最盛期を迎えた。しかし、海外産ホップの台頭や高齢化により近年では生産量が最盛期の6分の1にまで低下している。その中でホップの持続可能な生産体制を通じて地域活性化を図ることを目的に2007年にTKプロジェクトが発足した。当初は遠野市とキリン社のみであったが後に多くの企業や団体が参加するようになった。2015年からは取り組みが加速し遠野ホップ収穫祭、ビアツーリズムが開始された。これらの取り組みによって遠野市外からも人が訪れるようになった。現在、遠野市はホップ・ビールを観光資源として活用し、まちおこしに力を入れている。もともと遠野市の農業としてホップ栽培は営まれてきた。しかし、ホップ栽培が衰退したことによってそれを地域の資源として活かし、ホップ栽培を存続させようという取り組みがTKプロジェクトである。TKプロジェクトの結果、ホップ栽培から地ビール産業や観光業へと発展した。ホップ栽培は遠野市の地域の資源として新たな産業を生み出したと言える。

#### 付記

本稿を作成するにあたり、遠野市産業部産業企画課長 佐々木真奈美様、遠野市産業部産業企画課主事 朝倉海様、上閉伊酒造株式会社代表 新里佳子様、遠野ホップ農業協同組合 渡部智秋様、株式会社 Brew Good 代表 田村淳一様、株式会社遠野醸造代表 袴田大輔様、金沢星稜大学経済学部経営学科准教授 石川美澄様にはお忙しい中にも関わらず大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- ・ TONO JAPAN HOP COUNTRY 遠野で最高のビール体験を！  
<https://japanhopcountry.com/> （最終閲覧 2023/12/20）
- ・ 農林水産省 ホップに関する資料 平成 12 年 3 月  
<https://www.library-archive.maff.go.jp> （最終アクセス 2023/05/30）
- ・ 農林水産省 II ホップ  
[https://www.maff.go.jp/tohoku/seisan/tokusan/siryo/attach/pdf/touhoku\\_tokusan\\_siryou-11.pdf](https://www.maff.go.jp/tohoku/seisan/tokusan/siryo/attach/pdf/touhoku_tokusan_siryou-11.pdf) （最終アクセス 2023/05/30）

・農林水産省 東北農政局 東北管内のホップ生産地マップ

[https://www.maff.go.jp/tohoku/seisan/tokusan/syosai/hoppu\\_map.html](https://www.maff.go.jp/tohoku/seisan/tokusan/syosai/hoppu_map.html) （最終アクセス 2023/12/20）

・ホップに関する資料 平成 29 年 5 月 岩手県農林水産部農産園芸課

・河上康洋・永木正和・納口るり子 2001. 地域活性化施策における地ビール事業の位置付けと課題. 農業経営研究 39(1) : 87-90.

・鈴木孝一・鈴木信貴 2019. 農業における多角化経営（6次産業化）の分析. 研究技術計画 34 (3) : 315-327.

・石川美澄 2023. ホップ生産地におけるビアフェスティバルと来場者の特徴に関する一考察—「遠野ホップ収穫祭 2023」来場者アンケート調査を基に—. 第 38 回日本観光研究学会全国大会論文集 p.261-266

---

<sup>1</sup> 農林漁業の 6 次産業化：農林水産省

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/inobe/6jika/index.html> （最終アクセス 2024/02/17）